

主要地方道大東・東出雲線改良工事に伴う

北台遺跡発掘調査報告書

1998年3月

八雲村教育委員会

主要地方道大東・東出雲線改良工事に伴う

北台遺跡発掘調査報告書



0 40km

1998年3月

八雲村教育委員会

序

平成9年度の島根県松江土木建築事務所の事業として、「主要地方道大東・東出雲線改良工事」が実施されることとなりました。

八雲村教育委員会では、松江土木建築事務所の依頼によって、開発予定地にある北台遺跡の発掘調査を実施いたしました。

同地は、戦国時代に広瀬富田城の尼子氏が栄えていたころ、富田城を守る役目をもって作られた尼子十旗の一つ熊野城の城下に当たり、当時の八雲の中核をなしていた所であります。

従って平成9年11月より開始しました調査は、島根県教育庁文化財課の指導を頂きながら慎重に実施いたしました。

本調査は、八雲村教育委員会の川上昭一調査員を中心として、多数の村民の方々の熱心なご協力を頂きながら、発掘を実施いたしました。

本調査の過程で、埋設桶1基、柱穴1個、中世から近世にかけての多数の陶磁器が発見され、貴重な研究資料を得ることができ、この報告書を作成いたしました。

本調査によって、当時の状況が漸次明らかになって参ることは、まことに喜ばしいことではありますが、貴重な文化遺産が消えていくことに関しましては、誠に心寂しいものを感じます。

本調査及び報告書の作成に当たりまして、村上先生の御指導はもとより島根県教育庁文化財課から賜りました御指導御助言、また、直接発掘にご協力頂きました多数の村民の方々に衷心より敬意と感謝の意を表します。

平成10年(1998年)3月

八雲村教育委員会

教育長 佐原通司

例　　言

1. 本書は、松江土木建築事務所の委託を受けて、八雲村教育委員会が実施した主要地方道大東・東出雲線改良工事に伴う北台遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は平成9年6月24日から6月26日の間に遺跡の有無確認調査、これに基づいて同年11月19日から12月18日の間に本調査を実施した。遺跡の所在地及び調査面積は次の通りである。

島根県八束郡八雲村大字熊野1803-11番地　外3筆　346m²

3. 調査組織は以下の通りである。

事務局　佐原通司（教育長）、長島幸夫（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者　川上昭一（社会教育係主任主事）

調査指導者　村上　勇（広島県立美術館主任学芸員）

柳浦俊一（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）

作業員　安部直義、安部当子、安部益子、石倉恒雄、石倉隆了、石原君子、石原多鶴

石原政子、石原幸恵、近藤仁一、高尾万里子、田中和美、藤原秀子、山根隆

山根利子

遺物整理　武田裕子、田中和美、深津光子

4. 発掘調査、ならびに報告書の作成にあたっては、島根県教育庁文化財課の各位に有益なご助言を頂いた。記して感謝の意を表する。（順不同・敬称略）

西尾克己、岩橋孝典

5. 本書で使用した方位は磁北を示す。

6. 本書で使用したグリッドの呼称は、各方眼の北東の杭番号で呼ぶこととした。

7. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行のものを使用し、「調査区配置図」は松江土木建築事務所作成の工事図面を墨書きして使用した。

8. 本遺跡出土遺物及び調査記録は八雲村教育委員会で保管している。

9. 本報告書の編集と執筆は、上記の調査指導者や協力者の指導と助言を得ながら川上が行った。

目 次

I 位置と環境	1
II 調査に至る経緯	3
III 調査の経過	3
IV 遺跡の概要	4
1 遺構	6
(1) 埋設桶	6
(2) 柱穴	6
2 遺物	7
(1) 原始・古代の土器	
① 弥生土器	7
② 須恵器	7
(2) 国産陶磁器	
① 潤戸・美濃	8
② 常滑系	8
③ 備前	9
④ 備前系	10
⑤ 唐津	10
⑥ 肥前系磁器	11
⑦ 出雲系(意東焼)	12
(产地不明品)	14
(3) 上質土器	16
(4) 瓦質土器	17
(5) 中国産陶磁器	
① 褐釉	18
② 青磁	18
③ 白磁	19
④ 青花	19
(6) 金属製品	20
(7) 漆器	20
V 小結	21

I 位 置 と 環 境

八雲村は松江市の南郊、東経133°、北緯35°に位置し、東を東出雲町、西を大東町、南を広瀬町に囲まれた東西8km、南北10km、面積約55.41kmの山村で、総面積の80%以上が山林にある。

村の中央を意宇川が北流し中海に注いでおり、これに流れ込む数本の小河川が合流する下流部に平野が展開している。

遺跡はこの川と平野を取り囲む地域に多くみられ、下流域に向かうほど密集する。また、これまでの調査では、古墳時代のものが頗著である。

今回調査を行った北台遺跡（1）は、東西を山に囲まれた意宇川上流の標高88.50mを測る水田中に位置する。八雲村熊野字切岡によると、調査地の字名は「北台」と呼び、「北台」の地は長澤信通^(註1)を初代とする豪農長澤家の屋敷があったとされる場所である。現に調査地西側の隣接する地は、戦後に解体された長澤家の石垣が残り、通称千坪屋敷と呼ばれた敷地は、現在市場地区農村公園になっている。このことから、中世に遡る遺構の可能性が想定されたため調査を行うこととなった。

周辺の環境は、村内の遺跡の在り方としては珍しく中世の遺跡が密集する場所である。北台遺跡の500m北の御笠山山麓には、熊野大社上の宮跡（8）がある。本来熊野大神は、熊野山（現在の天狗山）に祀られていたものであるが、中世から近世末にかけて社は里に下り、上の宮と下の宮（現在の熊野大社）の二社祭祀の形態をとった。上の宮は、明治時代になって下の宮に合祀されるまで造営されていた場所である。また、800m北の標高87.00mの畠には、常滑系の壺を使用した鎌倉時代の墓が見つかった叶ザコ遺跡（5）が、200m東には時期は定かではないが一字一石経が出上した淨上寺経塚（9）がある。更に、600m南西の要害山山頂（標高281m）には尼子十旗の中に数えられる熊野城跡（10）がある。付近には、殿成・上の屋敷・紙屋・花屋・油屋などの屋号や、城屋敷・上組屋・万蔵寺・香正院・地正院などの字名が残っており、中世に繁栄した当時の町並みの一端を窺い知ることが出来る。

本村は、尼子氏の居城月山富田城のあった広瀬町と接し、中海・宍道湖が近いという地理的条件から、中世特に戦国時代前後の伝承・文化財が数多く残り、今後中世の遺跡の増加と重要な遺構の発見も予想される。

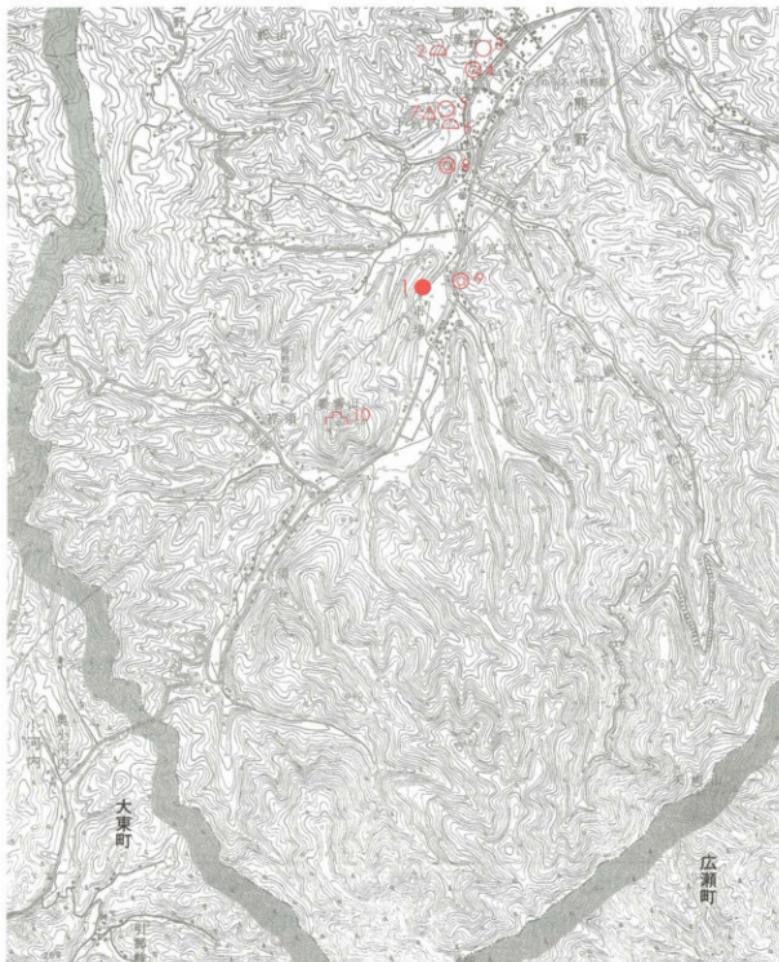
註 (1) 長澤家由緒書

(2) 地元の方への聞き取り調査による。

(3) 熊野大社山緒略記

(4) 宮本徳昭 「八雲村・叶ザコ遺跡出土の常滑甕」 『松江考古』第8号 松江考古学講演会 1992年

(5) 八雲村熊野地区字切岡



第1図 北台遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

- | | | | | |
|----------|----------|-------------|----------|----------|
| 1. 北台遺跡 | 2. 宮内横穴群 | 3. 熊野神社北遺跡 | 4. 熊野遺跡 | 5. 叶ザコ遺跡 |
| 6. 小島古墳群 | 7. 叶ザコ軒跡 | 8. 熊野大社上の宮跡 | 9. 浄土寺経塚 | 10. 熊野城跡 |

II 調査に至る経緯

大原郡大東町より八雲村を通り八束郡東出雲町に抜ける県道大東・東出雲線は、その大部分において一次改良工事が終わり、郡境部分と当村市場地区を残すのみとなっている。

島根県松江上木建築事務所では、平成9年度事業として市場地区において改良工事を実施することとなったが、現道沿いに民家が密集し拡幅が困難なことと地元住民の強い要望もあり、現道の100m西側にバイパスを設置することとなった。

この事業に先立ち、平成9年5月、八雲村教育委員会宛に改良工事予定地内の埋蔵文化財有無についての照会があった。これを受けて、八雲村教育委員会では平成9年6月3日に予定地内の分布調査を実施し、水田の耕作土より須恵器・土師器・陶磁器片を探取した。その後協議を行った結果、更に詳しく遺跡の有無・範囲を確認することとなり、同年6月24日から6月26日の間に試掘調査を実施した。

試掘調査により、長澤屋敷跡の東に隣接する水田中に青灰色粘土上の遺物包含層を検出し、遺跡が約300mの範囲に存在することを確認した。遺跡保護のため協議がなされたが、計画変更是困難との結論に達し、平成9年11月から12月にかけて調査を行うこととなった。

III 調査の経過

本発掘調査は、平成9年6月に実施した試掘調査結果に基づいて調査区を設定した。

調査はまず、平成9年11月19日より水田の耕作土と駐車場の盛り土を重機により除去することから始めた。耕作土を10~20cm、盛り土を50~100cm掘削し、遺物包含層上面を露出させた。調査区のはば中央を東西に生活道路が走り、調査区が2つに分かれる恰好になったため、便宜上、北側を調査区、北側・南側を調査区南側と呼ぶこととした。

次に、11月25日にグリッドの設定を行った。道路センター杭を使用し、No.69杭 ($X=955.328$ ・ $Y=995.826$) よりNo.70杭 ($X=975.249$ ・ $Y=997.591$) を睨み直線を設け、これと直交するように 2.5×2.5 mの方眼を組み、北東の交点をグリッド名とした。

この後、25日午後より掘削作業に取り掛かった。調査地は地下水が湧き出、泥離れが悪い粘性の非常に強い土であったため、掘削は困難を極めた。随時遺構の精査を行い、埋設桶1基、柱根の残った柱穴1個を検出し、12月12日に全体写真の撮影、12月16日に地形測量、12月18日に撤収作業を行い現場での調査を終了した。

なお、調査は各グリッド単位に行い、遺物の取り上げについてはグリッドの層位ごとに採取した。また、重要と思われる遺物については、一点一点出土地点を実測して取り上げを行った。

IV 遺 跡 の 概 要

調査地の基本的な層序は、耕作土の下に10~34cmの厚さで遺物包含層があり、これを取り除くと氾濫原と考えられる拳大の川石を多く含む疊層が堆積していた。疊層は無遺物層であったため、この上面を検出したところで掘削を終了した。調査地東側の水田は調査区域外となるため調査は行っていないが、土層の堆積状況より遺跡は更に東側に広がっていると考えられる。

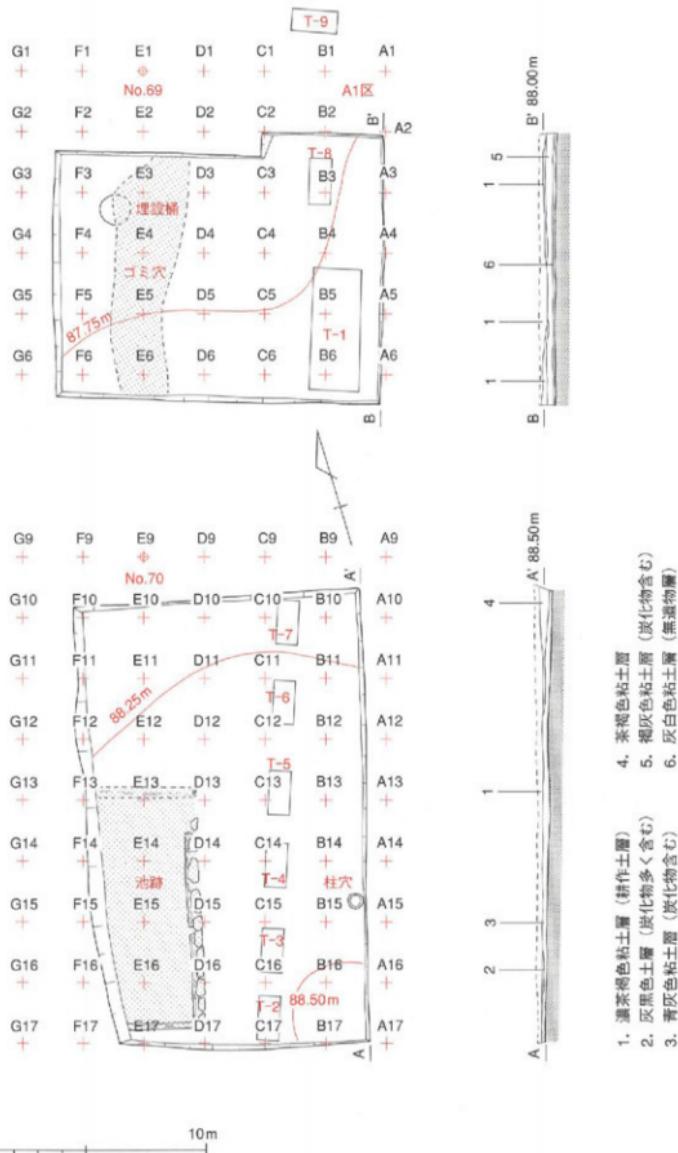
遺構としては、平成3年度に埋め立てられた長澤家の池跡の一部と時期不明の埋設桶1基、柱根の残った柱穴1個を検出した。池跡の埋土からはビニール製の肥料袋、瓦、木材が顔を覗かせ、サブトレンチにより堀り抜いてみたが、古い遺構は無く疊層を検出したため掘削は行わなかった。

出土遺物としては耕作土層下の青灰色粘土層、茶褐色粘土層、褐灰色粘土層より、原始・古代の土器、国産陶磁器、土師質土器、瓦質土器、中国産陶磁器、金属製品、漆器が出土した。

調査区は水田として利用されており、耕作土層からも遺物を採取することができた。また、平成3年度に重機により掘られたゴミ穴など擾乱された部分も一部にみられた。



第2図 調査区配置図



第3図 北台遺跡遺構位置図

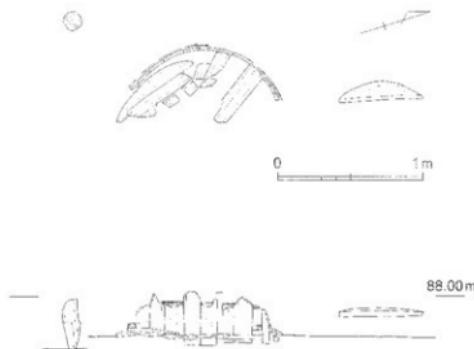
1 遺構

(1) 埋設桶 (第4図)

調査区北側のE-3区で検出されたもので、後世の掘削により3分の1程度しか遺存しておらず、掘り方も検出できなかった。平面形は円形を呈し、堆肥を入れる為に埋設されたと思われる。底板と側板が2段の竹製の「たが」で束ねられた部分が残っており、規模は復元で直径108cm、深さは底板から側板上部までが30cmを測る。桶の南西に径14cm、現状での長さ34cmの杭が打ち込まれていたが、これは埋設桶の上屋の棟柱に

関係するものと考えられる。

出土遺物としては、桶の中に堆積した泥層より土師質土器の細片が出土したが、図化できるものではなかった。また、E-3区からは遺物が69点出土しているが (P22第1表参照)、時期幅があり埋設桶の年代を特定することはできなかった。



第4図 埋設桶実測図

(2) 柱穴 (第5図)

調査区南側のA-14区で検出された上面径58×61cm、深さ最大31.1cmを測る柱穴であり、疊層中にまで掘り込まれていた。柱穴内には直径24.0cm、現状での長さ最大50cmを測る丸太材の柱根が残っていた。調査地からはこの他に柱穴は検出されず、これに伴う柱穴は東側の水田中に存在するものと思われる。

遺物は周辺から数点出土しているが、時期幅があり柱穴の年代を特定することはできなかった。



第5図 柱穴実測図

2 遺 物

北台遺跡からは、原始・古代の土器（弥生土器・須恵器・土師器）、国産陶磁器（瀬戸美濃・常滑系・備前系・唐津・肥前系磁器・出雲系）、土師質土器（皿・壺・碗・不明品）、瓦質土器（火鉢）、中国産陶磁器（褐釉・青磁・白磁・青花・天目）、金属製品、漆器が、遺物包含層（青灰色・褐灰色・茶褐色粘土層）より出土している。この中から実測可能なものについて項目ごとに掲載した。また、試掘調査時（T-1～9トレンチ）に出土した遺物もまとめて掲載している。

（1）原始・古代の土器

① 弥生土器（第6図1）

（1）T-6・青灰色粘質土層より出土した壺口縁部の破片である。端部が上下に拡張され、調整は口縁部内面がナデ、その他は風化が著しく不明である。胎土は1mm大の砂粒を含み、焼成はやや甘い。

② 須恵器壺（第6図2～6）

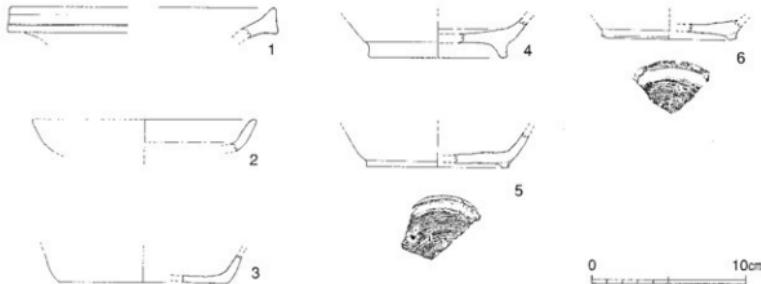
（2）D-14区・青灰色粘土層より出土した口縁部の破片で、復元口径14.6cmを測る。外傾する短い体部をもち、回転ナデが施される。胎土は細かく青灰色を呈し、焼成は良好である。

（3）C-16区・青灰色粘土層より出土した底部の破片で、復元底径11.0cmを測る。平坦な底部より外傾して立ち上がる体部をもつ。胎土は1mm前後の砂粒を多く含み灰色を呈し、焼成はやや甘い。

（4）B-15区・青灰色粘土層より出土した底部の破片で、復元底径9.0cmを測る。「ハ」の字に開くしっかりした高台が付けられ、回転ナデが施される。胎土は1mm前後の砂粒を含み灰色を呈し、焼成は良好である。

（5）T-3・青灰色粘土層より出土した底部の破片で、復元底径9.3cmを測る。回転糸切り後、底部端に低い高台が付けられている。胎土は1mm以下の砂粒を含み紫灰色を呈し、焼成は良好である。

（6）B-14区・青灰色粘土層より出土した底部の破片で、復元底径8.7cmを測る。回転糸切り後、底部端に低い高台が付けられている。胎土は1mm大の砂粒を含み青灰色を呈し、焼成は良好である。



第6図 弥生土器・須恵器実測図

(2) 国産陶磁器

① 濑戸・美濃 (第7図 7~12)

(7) A-2区・褐灰色粘土層、B-14区・青灰色粘土層より出土したものが一致した壺口縁部の破片で、復元口径16.8cmを測る。口縁にかけて内湾気味に立ち上がり、口唇部は僅かに外反するもので、調整は回転ナデが施されている。胎土は細かく、焼成はやや甘い。灰白色の素地に灰オリーブ色の灰釉が内外面に薄く施され細かい貫入がはいる。時期は、室町時代初頭のものである。

(8) B-3区・青灰色粘土層より出土した壺口縁部の破片で、復元口径11.2cmを測る。外反する口縁と張り出した体部をもち、調整は回転ナデが施される。胎土は細かく、焼成はやや甘い。灰白色の素地にオリーブ灰色の灰釉が薄く施され貫入が入るが、体部内面は無釉である。古瀬戸焼の製品と思われる。

(9) D-5区・青灰色粘土層より出土した皿の口縁端部の破片で、復元口径11.2cmを測る。口縁部が外反し、内面に浅い受け部をもち、調整は回転ナデが施されている。胎土は細かく、焼成はやや甘い。灰白色の素地に黄褐色の灰釉が口縁端部外面から内面に薄く施されているが、二次的に火を受けくすんだ色を呈している。時期は、室町時代初頭のものである。

(10) A-2区・褐灰色粘土層より出土した皿、あるいは盤底部の破片で、復元底径16.4cmを測る。底部と体部の境にボタン状の脚が指と範状工具により貼り付けられている。胎土は細かく、焼成はやや甘い。素地は灰白色を呈し、底部のため釉薬は認められない。瀬戸焼の製品で室町時代初期のものである。

(11) T-1・褐灰色粘土層より出土した天目茶碗口縁部の破片である。内湾気味に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。胎土は灰色で細かく、焼成は良好である。鉄釉が内外面に施される。

(12) B-3区・青灰色粘土層より出土した皿口縁部の破片で、復元口径13.0cmを測る。逆「八」の字状に立ち上がり、口縁部はやや外反する。胎土は灰色で細かく、焼成は良好である。オリーブ灰色の釉薬が内外面に施されているが、二次的に火を受けくすんでいる。

北台遺跡からはこの他にも瀬戸・美濃の破片が12点ほど出土している。器種の判るものは瀬戸の鉢皿がT-1・碗葉土から出土しているが、細片のため実測できなかった。

② 常滑系 (第8図 13~15)

(13) E-3区・青灰色粘土層より出土した口縁端部の破片で、復元口径46.3cmを測る。口唇部は上と下に摘み出すようになっており、外側は外反し、内側は一段受け部がつき、いわゆるN字状口縁を呈している。

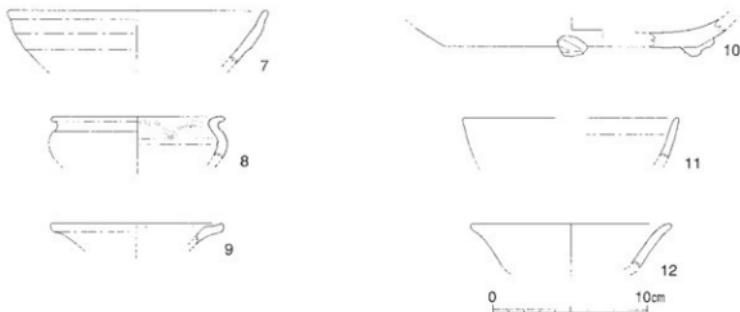
(14) A-2区・褐灰色粘土層より出土した頸部の破片で、頸部より肩部に向かって大きく開くものである。

(15) C-6区・青灰色粘土層より出土した底部の破片で、復元底径23.0cmを測る。平底の底部と考えらる。

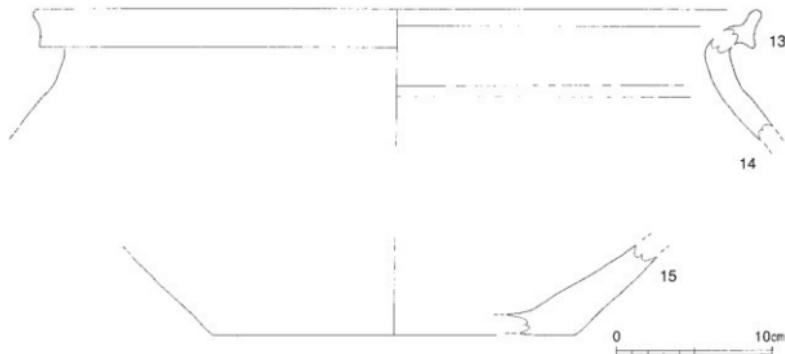
いずれも1mm前後の砂粒を多く含み、良く焼き縮まり灰色を呈している。形態等から13世紀後半の

常滑系の甕と考えられる。

北台遺跡からはこの他にも常滑系の甕の破片が42点ほど出土している。村内における出土例としては、戸波遺跡、叶ザコ遺跡の2個所が知られている。



第7図 濑戸・美濃実測図



第8図 常滑系実測図

③ 備前 (第9図 16・17)

(16) T-4・青灰色粘土層より出土した擂鉢口縁部の破片で、復元口径24.8cmを測る。口縁が肥大化した時期のもので、外面の溝は発達していない。胎土は3mm大の砂粒を含み、焼き縮まっている。色調は全体に赤褐色を呈するが、外面の一部は窯変（火わり）のため青灰色を帯びる。調整は内外面とも回転ナデが施される。時期は、15世紀代のものと考えられる。

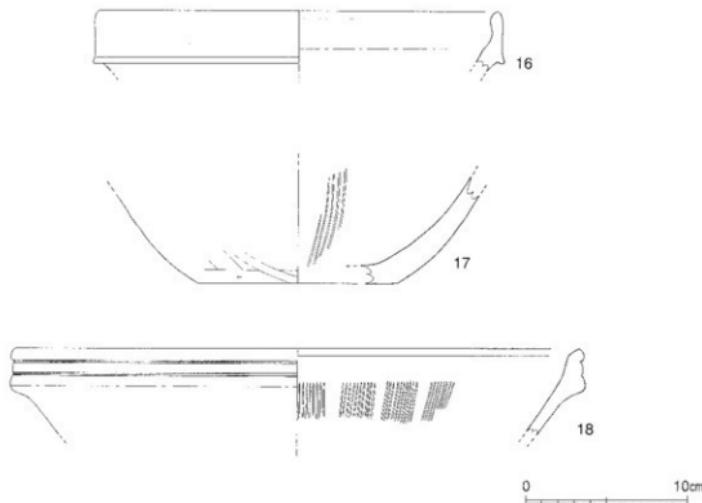
(17) C-91区・青灰色粘土層より出土した擂鉢底部の破片で、復元底径12.2cmを測る。平底の底部

と考えられ、体部内面には5条以上1組の条溝が刻まれている。胎土は1mm以下の砂粒を含み、良く焼き締まり、色調は紫灰色を呈する。調整は内外面とも回転ナデが施され、特に体部外面の底に近い部分は強いナデ（ヘラ削りか）が加えられる。時期は、室町時代後半の戦国期に近い頃と考えられる。

北台遺跡からはこの他にも備前焼擂鉢の破片3点、壺甌類体部の破片29点が出土している。

④ 備前系（第9図 18）

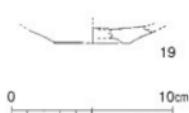
(18) B-9区・青灰色粘土層より出土した擂鉢口縁部の破片で、復元口径35.2cmを測る。口縁端部は厚く肥大化され、外面に2条の沈線がめぐり、体部内面には10本1組のしっかりした条溝が刻まれている。胎土は1mm以下の微砂粒を多く含み良く焼き締まり、素地は明青灰色を呈する。暗赤褐色の鉄釉が内外面に薄く塗布され、刷毛あるいは筆跡が残る。室町期から桃山期の備前焼の擂鉢を模倣して作られたものであるが、時期や産地は不明である。



第9図 備前・備前系実測図

⑤ 唐津（第10図 19）

(19) 調査区北側の廃棄土中から採取された高台部分の破片で、見込部分に砂の目跡が残るものである。高台は浅く削り出され、復元底径4.6cmを測る。胎土は細かく灰色を呈し、焼成は良好である。浅黄色の釉薬が内面に薄く施されている。時期は、17世紀初頭のものと考えられる。



第10図 唐津実測図

⑥ 肥前系磁器（第11図 20～33）

皿（第11図 20～23）

(20・21) 半円形の短い体部をもついわゆる“くらわんか手”の皿である。高台は、斜め方向になだらかに削り出され厚手である。透明釉が全面に施されるが、置付部分と見込の置付があたる部分は無釉で、一部に砂粒が付着している。法量ははそれぞれ、口径11.8cm、底径5.1cm、器高3.4cm・口径11.4cm、底径4.4cm、器高3.5cmを測る。E-4、5区・青灰色粘土層上面から出土した。

(22・23) (20)・(21)と同様のもので、直立した短い高台をもつ。(22)は、見込にコンニャク判による五弁花文をもつ。法量はそれぞれ、口径9.4cm、底径4.6cm、器高2.6cm・口径13.2cm、底径8.4cm、器高3.5cmを測る。T-1・褐灰色粘土層、B-10区・青灰色粘土層から出土した。

碗（第11図 24～30）

(24) T-7・青灰色粘土層より出土した口縁部の破片で、復元口径10.4cmを測る。内湾気味に伸びる体部をもち、外面に土坡と草文様が描かれている。

(25) E-2区・青灰色粘土層より出土した口縁部の破片で、復元口径10.6cmを測る。内湾気味の口縁をもち、体部外面の丸文様の中に簡略化した七宝文が描かれている。

(26) E-2区・青灰色粘土層より出土した口縁部の破片で、復元口径12.9cmを測る。内湾気味に斜上方に伸びる体部をもつ。模様は、内面の口縁部と底部に圓線、外面は胴部下に圓線、口縁部やや下に「D」字状の文様が描かれている。

(27) F-3区・青灰色粘土層より出土した口縁部の破片で、復元口径11.0cmを測る。内湾気味に斜上方に伸びる体部をもち、口縁部内面に圓線が描かれている。

(28) E-2区・青灰色粘土層より出土した口縁部の破片で、復元口径12.1cmを測る。直線的に斜上方に伸びる体部をもち、口縁部内面と外面胴部下に圓線が描かれている。

(29) A-9区・青灰色粘土層より出土した口縁部の破片で、復元口径13.4cmを測る。半円形の短い体部をもち、模様は、外面が唐草文、内面は圓線で区画され花唐草文が描かれている。形態および模様から(30)と同種のものと思われる。

(30) T-1・耕作土下層より出土した底部の破片で、復元底径7.0cmを測る。直立した短い高台をもち、模様は、底部と体部の境を圓線で区画し、体部に花唐草文が描かれ、外面は高台、高台裏、腰部に圓線が描かれている。

猪口（第11図 31～33）

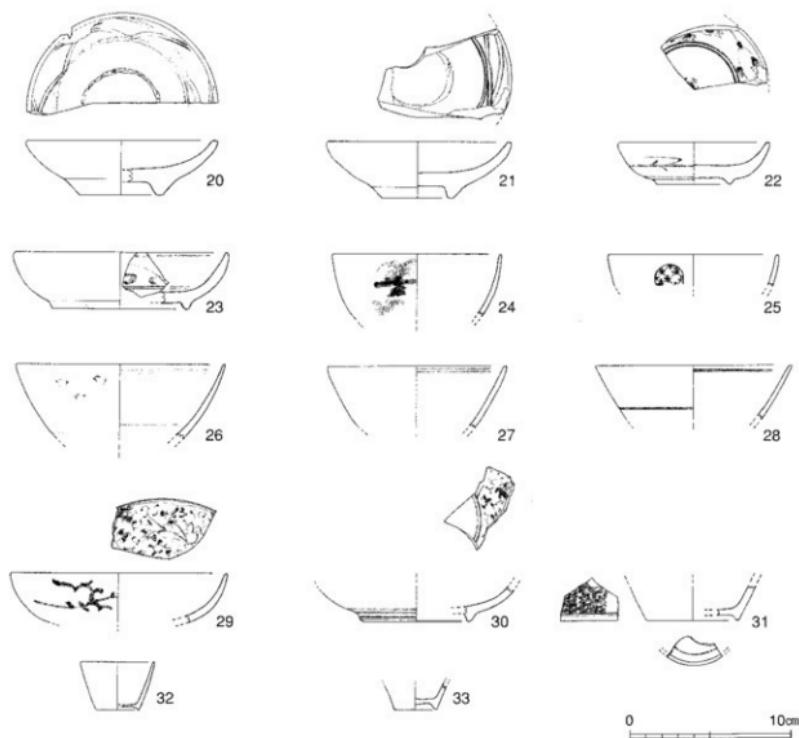
(31) C-16区・青灰色粘土層より出土した高台部分の破片で、復元底径5.7cmを測る。底部端に低い高台をもち、斜上方に立ち上がる直線的な体部をもつ。模様は、底部外面と高台裏に圓線、体部外面に印判により蛸唐草文様が描かれている。

(32) T-1・耕作上下層より出土したもので、口径4.5cm、底径2.6cm、器高3.0cmを測る。平坦な底部の端に低い高台をもち、直線的に斜上方に立ち上がる。

(33) T-2・青灰色粘土層より出土した底部の破片で、復元底径2.6cmを測る。平坦な底部の端に

低い高台をもち、斜上方に立ち上がる直線的な体部をもつ。

北台遺跡から肥前系の磁器は45点出土しているが、このうち実測可能なものについて掲載した。いずれも精選され緻密な磁器土で白色を呈し、焼成は良好である。透明釉が施されるが、骨付部分の釉は剥ぎ取られているか無釉である。時期は、18世紀初頭から江戸時代後期に至るものと考えられる。



第11図 肥前系磁器実測図

⑦ 出雲系（第12・13図 34～51）

意東焼（第12図 34～40）

(34) D-4、E-4区・青灰色粘土層上面から出土した“広東碗風”的染付磁器で、口径11.0cm、底径6.6cm、器高6.15cmを測る。模様は、体部外面に流水、山、東屋、柳、樹木の山水文様が描かれている。見込部分にも文様が描かれているが不明である。

(35) F-3区・青灰色粘土層から出土した(34)と同形態、同模様のもので、口径12.7cm、底径6.4cm、器高6.3cmを測る。具須の発色は(34)に比べると青味が加っている。

(36) B-16区・青灰色粘土層から出土した広東碗風の染付磁器底部の破片で、復元底径6.6cmを測る。模様は、体部外面に土坡と草花文が描かれている。見込部分にも文様が描かれるが不明である。

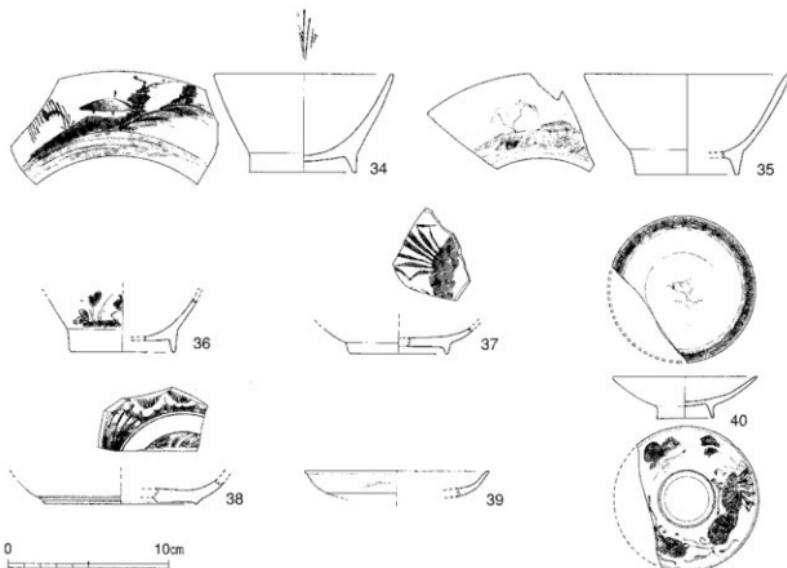
(37) D-4区・青灰色粘土層から出土した染付磁器碗底部の破片で、直立する低い高台をもち、復元底径6.2cmを測る。模様は内面に草と土坡文様が描かれている。

(38) E-6区・青灰色粘土層から出土した染付磁器碗底部の破片で、蛇の目高台をもち、復元底径9.4cmを測る。模様は、見込部分が円区画、底部と体部の境が圓線で区画され、この中に草花と思われるものが描かれている。

(39) B-10区・青灰色粘土層から出土した染付磁器皿口縁部の破片である。内湾して立ち上がり、口縁部でやや外反するもので、復元口径11.4cmを測る。二次的に火を受け煤が付着している。外面に文様が描かれているが全容は不明である。

(40) E-5区・青灰色粘土層上面から出土した染付磁器坏で、口徑8.9cm、底径3.6cm、器高2.6cmを測る。全体に薄作りで、直立気味に立ち上がる高台と大きく開く体部をもつ。模様は、口縁部内面が帶文、内面底部が円区画され中央に鷺文、外面は圓線で区画され体部に草花か宝文と思われるものが描かれている。

いずれも精選された緻密な磁器土で、白色を呈し、焼成は良好である。肥前系磁器との判別は困難であるが、隣接する東出雲町の意東焼と考えられ、19世紀の第2四半期を中心とした遺物と考えられる。



第12図 出雲系（意東焼）実測図

産地不明品（第13図 41～51）

(41) 調査区北側の重機掘削時に採取された紅皿で、口径4.5cm、底径1.4cm、器高1.25cmを測る。胎土は精選され緻密な磁器土で白色を呈し、焼成は良好である。淡い明緑灰色の透明釉が内面と口縁外面の一部に施されている。形態等は九州産のものと同じであるが、広瀬町の塩谷辺りでも同様の小皿が焼かれている。

(42) 復元口径12.2cmを測る碗の破片で重機掘削時に採取された。胴部中央が最も膨らみ、胴部から口縁部に向かっては内側に僅かに内湾するいわゆる“ぼてぼて茶碗”と呼ばれるものである。胎土は灰黄色で細かく、焼成はやや甘い。緑青色の釉薬が内外面とも薄く均一に施されているが、高台脇は無釉である。これらの特徴から布志名系のものと思われる。

(43) E-3区・青灰色粘土層より出土した口縁部の破片で、復元口径11.0cmを測る。(42)と同形態で、胎土は灰色で細かく、焼成は良好である。灰白色の釉薬が内外面に薄く均一に施されている。

(44) 調査区北側の重機掘削時に採取された玉縁状の口縁部をもつ鉢の破片で、復元口径25.6cmを測る。胎土は1mm以下の微砂粒を含み黄灰色を呈し、焼成は良好である。艶のあるオリーブ色釉と灰白色釉が施されるが、体部外面の下部分は無釉である。形態等から広瀬町の八幡辺りで焼かれたものと思われる。

(45) T-1・耕作土層より出土した復元底径7.4cmを測る高台部分の破片で、見込部分に砂の日跡が残るものである。胎土は細かくにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。艶のある半透明釉が薄く施されるが、置付の部分は無釉である。

(46) E-6区・青灰色粘土層より出土した皿底部の破片で、復元底径10.2cmを測る。胎土は微砂粒を多く含み橙色を呈し、焼成は良好である。艶のある暗赤褐色釉が内面に薄く施される。

(47) C-10区・青灰色粘土層より出土した上瓶の口縁部分の破片で、復元口径9.3cmを測る。胎土は細かく灰白色を呈し、焼成は良好である。浅黄色の半透明釉が外面と内面の一部に薄く施される。

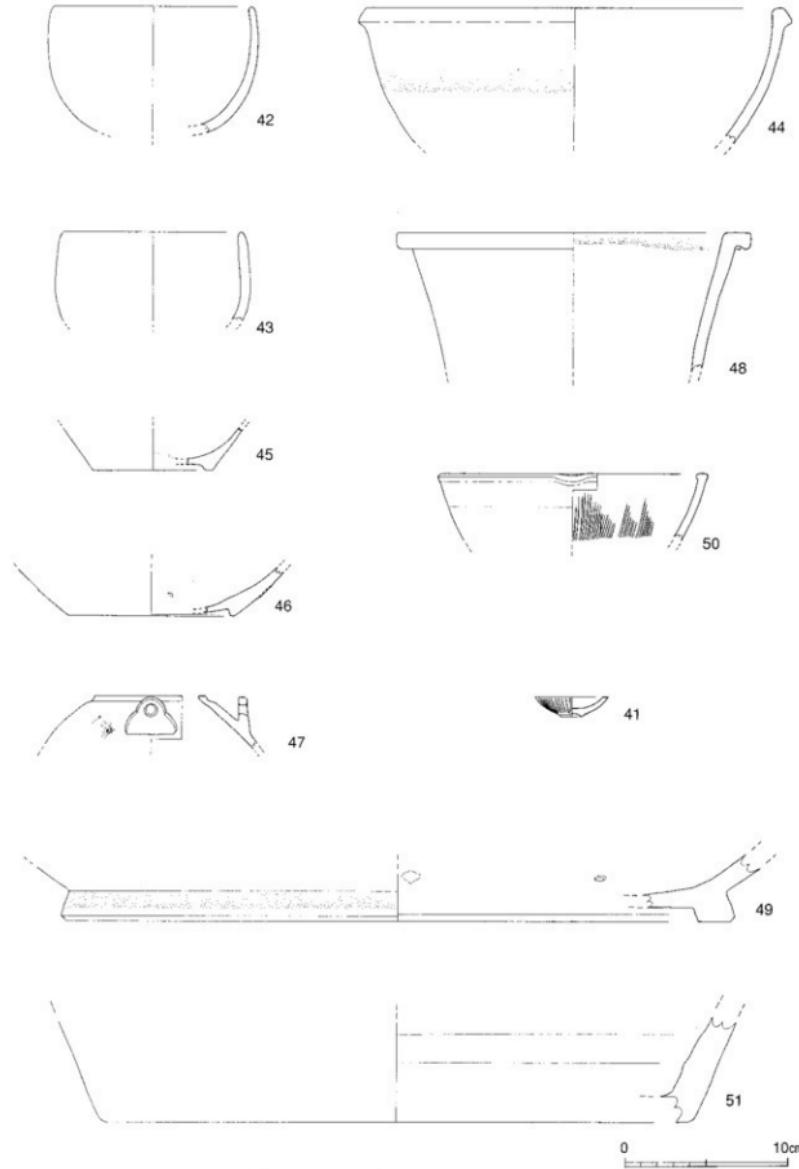
(48) 重機掘削時にE-2区より出土した深鉢口縁部分の破片で、復元口径21.8cmを測る。胎土は3mm大の砂粒を含み灰色を呈し、焼成は良好である。艶のある暗オリーブ色釉が口縁部内面から外面にかけて施される。

(49) E-2区・青灰色粘土層より出土した、復元底径41.4cmを測る大皿底部の破片で、見込部分に日跡が残るものである。胎土は1mm大の砂粒を多く含み褐色を呈し、焼成は良好である。灰白色釉が施されるが、骨付と高台裏は無釉である。

(50) F-3区・茶褐色粘土層より出土した鉢口縁部分の破片で、復元口径16.6cmを測る。胎土は細かく橙色を呈し、焼成は良好である。暗赤褐色釉が全面に施される。

(51) A-14区・青灰色粘土層より出土した甕底部の破片で、復元底径36.2cmを測る。胎土は2mm前後の砂粒を多く含み赤褐色を呈する。焼成は甘く雑な作りになっている。

ここでは、出雲国（島根県内）で焼かれた陶磁器で、産地が明確でないものを産地不明品として掲載した。時期は、(41～49)が江戸後期から明治頃。(50)が明治時代。(51)は時期不明である。



第13図 出雲系（产地不明品）実測図

(3) 土師質土器 (第14図 52~64)

皿形土器 (第14図 52~61)

(52) T-6・青灰色粘土層より出土したもので、口径7.6cm、底径6.45cm、器高1.1cmを測る。体部は内湾気味に短く立ち上がり端部は丸く、底部の切離しは回転糸切りによる。胎土は、微砂粒を多く含みにぶい黄橙色を呈する。

(53) A-4区・褐灰色粘土層より出土したもので、口径7.4cm、底径5.0cm、器高1.4cmを測る。体部は短く逆「ハ」の字状に立ち上がり、底部の切離しは静止糸切りによる。胎土は、1mm大の砂粒を含み橙色を呈する。

(54) T-1・褐灰色粘土層より出土したもので、口径6.5cm、底径4.2cm、器高1.35cmを測る。体部は短く逆「ハ」の字状に立ち上がり、底部の切離しは静止糸切りによる。胎土は、微砂粒を含み黄灰色を呈する。

(55) A-4区・褐灰色粘土層より出土したもので、口径8.2cm、底径5.85cm、器高1.5cmを測る。体部は短く逆「ハ」の字状に立ち上がり、底部の切離しは風化のため不明である。胎土は、微砂粒を含み浅黄橙色を呈する。口縁の一部に煤が付着しており、燈明皿として使用された可能性がある。

(56) T-7・青灰色粘土層より出土したもので、口径8.2cm、底径6.2cm、器高1.65cmを測る。体部は短く逆「ハ」の字状に立ち上がり、端部は丸く、底部の切離しは回転糸切りによる。胎土は、微砂粒を多く含み灰黒色を呈する。

(57) B-3区・青灰色粘土層より出土したもので、口径8.8cm、底径6.6cm、器高1.55cmを測る。体部は短く逆「ハ」の字状に立ち上がり、端部は丸く、底部の切離しは風化のため不明である。胎土は、微砂粒を多く含み淡橙色を呈する。

(58) B-2区・青灰色粘土層より出土したもので、口径7.2cm、底径2.7cm、器高2.0cmを測る。体部はやや内湾気味に立ち上がり、外方向に緩やかに広がる。胎土は、微砂粒を含み浅黄橙色を呈する。

(59) E-2区・青灰色粘土層より出土したもので、口径9.6cm、底径4.4cm、器高1.9cmを測る。体部は逆「八」の字状に立ち上がる。胎土は、微砂粒を含み浅黄橙色を呈する。

(60) A-2区・褐灰色粘土層より出土したもので、口径10.4cm、底径5.4cm、器高1.6cmを測る。体部は直線的に大きく広がる。胎土は、微砂粒を含み浅黄橙色を呈する。口縁の一部に煤が付着しており、燈明皿として使用された可能性がある。

(61) A-9区・青灰色粘土層より出土したもので、口径8.4cm、底径3.8cm、器高2.0cmを測る。体部は半円形を呈し、切離しは回転糸切りにより上げ底氣味である。胎土は、微砂粒を含み橙色である。

坏形土器 (第14図 62)

(62) T-1・褐灰色粘土層より出土したもので、口径12.7cm、底径5.5cm、器高3.3cmを測る。体部は、平底の底部より逆「ハ」の字状に直線的に伸び、底部の切離しは回転糸切りと思われるが、風化のため鮮明ではない。胎土は、微砂粒を含み橙色を呈する。

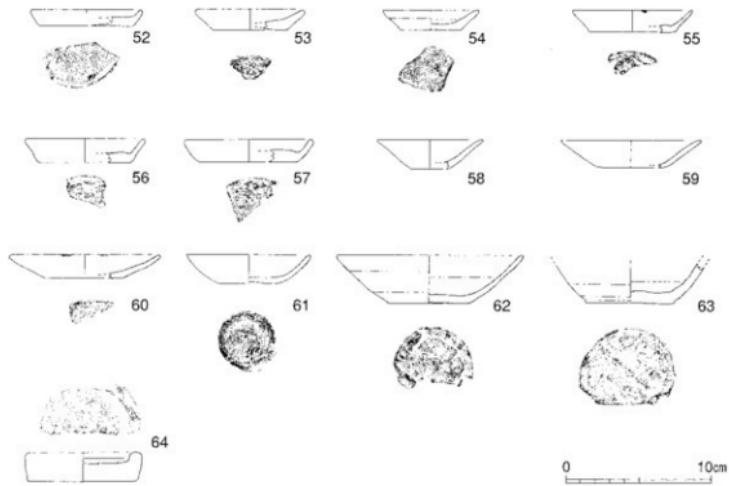
碗形土器 (第14図 63)

(63) B-9区・青灰色粘土層より出土した碗底部の破片で、底径6.05cmを測る。底部は平底で、内湾気味に立ち上がる体部をもち、切離しは回転糸切りによる。胎土は、微砂粒を含み橙色を呈する。

不明品（第14図 64）

(64) C-10区・青灰色粘土層より出土した土師質のもので、口径8.0cm、底径7.4cm、器高2.0cmを測る。底部は平底で、短く厚手の口縁が立ち上がり、口縁端部は丸い。調整は外面は滑らかに仕上げられ、内面には布目痕がある。胎土は他の土師質土器と比べると異質で細かく、良く焼締まりにぶい赤褐色を呈している。型抜きに使われた土型のようなものと思われる。

土師質土器は、北台遺跡から出土した遺物の約78%を占める。そのうち全容が判るものだけここに掲載している。風化の著しいもの以外はすべてロクロ整形で、底部の切離しは糸切りによるものと思われる。焼成は土師質のものとしては比較的良好である。



第14図 土師質土器実測図

（4）瓦質土器

火鉢（第15図 65～67）

(65) II縁部は平坦で波状口縁を呈する。II縁部外面に凸帯が巡り、凸帯下に雷文が押捺されている。F-2区・青灰色粘土層より出土した。

(66) II縁部は平坦で外面に底状に飛び出し、凸帯が巡る格好を呈する。凸帯下には雷文が押捺されている。D-5区・青灰色粘土層より出土した。

(67) II縁部付近の破片で、外面に凸帯が巡り、凸帯上に雷文が押捺されている。F-5区・青灰

色粘土層より出土した。

いずれも破片のため、器のスタイルは不明である。胎土は1mm前後の砂粒を多く含み、焼成も甘く、ザラザラした質感である。室町期に奈良周辺で製作されたものと考えられる。



第15図 瓦質土器（火鉢）実測図

(5) 中国産陶磁器

① 褐 紬 (第16図 68)

(68) B-15区・青灰色粘土層より出土した中国明代の褐釉四耳壺と考えられるが、破片のため法量は不明である。胎土は1mm前後の砂粒を含み、良く焼き縮まり褐灰色を呈する。外面に暗オリーブ褐色の釉薬が施される。

北台遺跡からはこの他にも褐釉の破片が3点ほど出土している。

② 青 磁 (第16図 69~75)

皿 (第16図 69)

(69) 口縁部が内側に屈曲し端部は丸いもので、復元口径21.8cmを測る。釉調は二次的に火を受け、くすんだ明オリーブ灰色を呈する。T-6・青灰色粘土層より出土した。

碗 (第16図 70~75)

(70) 体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反するもので、復元口径10.0cmを測る。T-1・褐灰色粘土層より出土した。

(71) 内湾気味に立ち上がり、口縁部がやや外方向に開くもので、復元口径14.0cmを測る。B-12区・青灰色粘土層より出土した。

(72) 内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反するもので、復元口径15.1cmを測る。A-2、3区・褐灰色粘土層より出土した。

(73、74) 直線的に立ち上がり、口縁部がやや外反するもので、復元口径はそれぞれ11.7cm、14.8cmを測る。T-8・褐灰色粘土層、B-2区・青灰色粘土層より出土した。

(75) 直立気味の低い高台をもつ碗底部の破片で、復元底径6.7cmを測る。高台部分にも釉が施されている。A-6区・褐灰色粘土層より出土した。

いずれの磁土も精造され緻密で、黒い微砂粒を含む。釉調は緑灰色かオリーブ灰色のいわゆる青磁色を呈し、時期は、14世紀から15世紀頃のものと考えられる。

北台遺跡からはこの他にも中国青磁の破片が調査区北側を中心に22点ほど出土している。

③ 白 磁 (第16図 76・77)

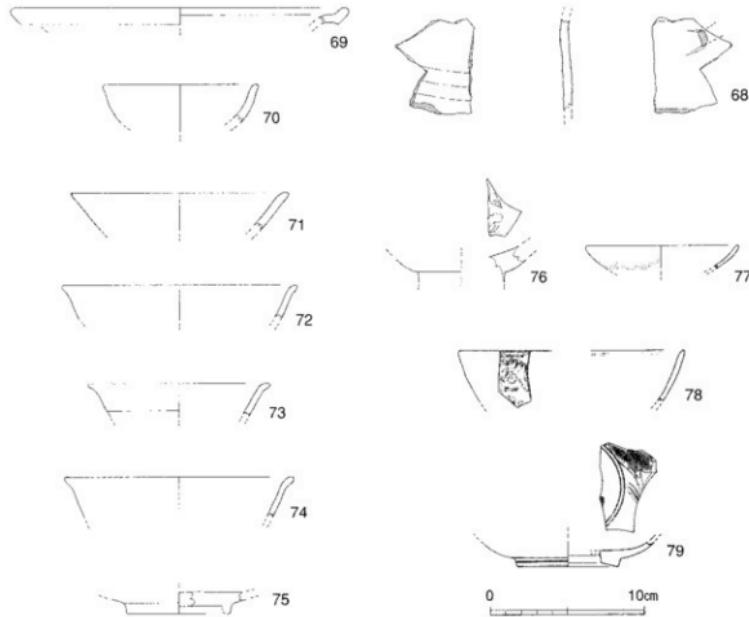
(76) D-5区・青灰色粘土層より出土した高台部分の破片で、見込み部分に印花文をもつ。磁土は精選され緻密で、黒い微砂粒を含む。釉調は灰オリーブ色を呈し、時期は、14世紀代のものと考えられる。

(77) T-1・褐灰色粘土層より出土した口縁部の破片で、復元口径9.7cmを測る。体部より内湾気味に大きく開き、口縁部を丸くおさめたものである。磁上は精選され緻密で、釉調は灰白色を呈し、貫入が多い。時期は、15世紀前後のものと考えられる。

④ 青 花 (第16図 78・79)

(78) C-10区・青灰色粘土層より出土した口縁部の破片である。内湾気味に立ち上がる体部をもつ。模様は、口縁部内面に圓線、体部外面は何を描いたものか不明である。胎上は緻密な磁器土で白色を呈し、焼成は良好である。透明釉(染付釉)が施される。時期は、16世紀後半頃と思われる。

(79) E-6区・青灰色粘土層より出土した中国青花の可能性のある碗底部の破片で、復元底径6.6cmを測る。蛇の目高台と内湾気味に立ち上がる体部をもつ。模様は、底部内面と高台外面に圓線、体部内面と見込部分に文様があるが不明である。胎土は緻密な磁器土で白色を呈し、焼成は良好である。透明釉が施されるが、置付と高台裏は無釉である。時期は、16世紀後半頃と思われる。



第16図 中国産陶磁器実測図

(6) 金属製品 (第17図 80)

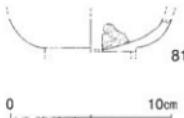
(80) T-7・青灰色粘土層より出土した銅製品である。端部を折り曲げ返りをつけ、平面菊花形を呈する。直徑4.5cm、厚さ0.5~1mmを測り、中央に6mm角の方形の孔が穿たれている。色調は暗緑灰色を呈するが、出土時は明赤褐色に輝く部分もみられた。燭台の一部と思われる。

(7) 漆 器 (第18図 81)

(81) B-9区・青灰色粘土層より出土した漆器碗底部の破片で、復元底径5.6cmを測る。高台裏面を凹め、休部は内湾して立ち上がる。内面に朱漆が薄く塗られている。樹種は不明である。



第17図 金属製品実測図



第18図 漆器実測図

陶磁器の产地、時期については村上勇氏にご教示頂いた。

註 (1) 「戸波遺跡発掘調査報告書」八雲村教育委員会 1993年

【参考文献】

- 『石台遺跡—馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告書』島根県教育委員会 1986年
『朝倉川中小河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 曽の前遺跡』島根県教育委員会 1995年
『寺の前遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 1995年
『黒田畠遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 1995年
『一ノ原排水路改良工事に伴う一ノ王寺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 1996年
『宮尾古墳群他発掘調査報告書』松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 1996年
『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
『—北海道から沖縄まで—国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館 1984年
『日本出土の貿易陶磁 西日本編1』国立歴史民俗博物館 1993年
『松江考古』第8号 松江考古学談話会 1992年
内田律雄・木間恵美子「出雲意東長戦山焼について」「八雲立つ風土記の丘」49号 1981年
『陶芸の伝統技法』大西政太郎著 理工学社
『陶芸の釉薬—理論と調製の実際—』大西政太郎著 理工学社
『古伊万里の文様』大橋康二著 理工学社
『原色陶器大辞典』加藤唐九郎編 淡交社

V 小 結

今回の北台遺跡の調査では、調査区北側・調査区南側の隣接する水田中より埋設柱1基と柱根の残った柱穴1個を検出した。耕作土直下に堆積した10~34cmの薄い遺物包含層（青灰色・茶褐色・褐灰色粘土層）からは、弥生土器から明治時代の陶磁器に至るまで非常に時期幅がある遺物が伴っており、遺構の時期を特定することはできなかった。

遺物は、後世に擾乱を受けた場所以外から、ほぼまんべんなく出土している。完形品ではなく、破片ばかり2201点が見つかった。種類には、原始・古代の土器（弥生土器・須恵器・土師器）、国産陶磁器（瀬戸美濃・常滑系・備前・備前系・唐津・肥前系磁器・出雲系）、土師質土器（皿・壺・碗・不明品）、瓦質土器（火鉢）、中国産陶磁器（褐釉・青磁・白磁・青花・天目）、金属製品、漆器がある。

ここでは、第1・2・3表の説明と若干の考察を行いたい。

第1表は、これら出土遺物の破片数を区毎にまとめたものである。この表中には池跡とゴミ穴から見つかった現代の瓦は含まれていない。また、()内の数字は区が違うが接合出来たもので、接合したものと1個体として計算した。

第2表上のグラフは、出土遺物の占める割合を出したものである。総数の77.78%が土師質土器で占められているが、殆どのものが風化の著しい細片であり、実測図にはこのうち実測が可能であった13点を掲載した。これら土師質土器の年代については当地方における詳細な編年は確立していないが、周辺の事例を参考にすると、鎌倉時代~室町時代後期のものが多く含まれていると考えられる。

原始・古代の土器として、弥生時代後期の土器、奈良~平安時代の須恵器が混在していることから、近辺にこれらの時期の遺構が存在する可能性がある。

第2表下のグラフは、陶磁器の産地別に占める割合である。14・15の不明品が多くなっているが、これは細片が多かったためであり、14の不明磁器の大半は江戸時代後期の肥前系磁器と考えられる。

第3表は、第2表下のグラフのうち時期の判るものだけを年表に当てはめたものである。各時代を通して遺物が出土しているが、16世紀にあたる遺物が少ない。位置と環境で触れたように、「北台」の地は長澤信通を初代とする長澤家の屋敷があったとされる場所であり、信通が天文四年（1535年）生まれという記録があったことから、16世紀中頃の遺構を想定して調査に入ったが、時代的に符合する遺物は5点ばかりであった。これ以前の遺物の中に中国産陶磁器が38点出土していることから輸入陶磁器入手できる有力豪族の屋敷跡があったことは間違いないと思われるが、長澤家との関係は不明である。13~15世紀代の遺物と17世紀以降の遺物の量からすると、16世紀中頃に生活の舞台が移ったことも考えられ、この時期に熊野城が戦禍に巻き込まれたことと少からず関係するものと思われる。或いは、「千坪屋敷」と呼称されている中心部を調査すれば、当時期の遺構が検出される可能性はあるが、今回は工事予定地外であるため調査は行っていない。

遺構的にはかなり不明瞭な点があったが、遺物からみると、今後この地方での陶磁器の在り方について考えるとき価値のあるものである。

第1表 北台遺跡出土遺物破片数

原始 古代の土器	國産陶磁器				中國産陶磁器				鉄製漆器		合計												
	青磁	白磁	陶器	漆器	青磁	白磁	青磁	漆器	青磁	漆器													
A-2	3	1(1)	3	1			1	44			54(2)												
A-3	1		2				1	34	1(1)	1	40(1)												
A-4				1				59			60												
A-5	1		2				1	113			117												
A-6							1	2		1	4												
A-9				1				1			2												
A-10	2	3	4				3	1	9		22												
A-11	1	1					2	2	17		23												
A-12									11		11												
A-13							1		20		21												
A-14				1	1	3		4			9												
A-15	1						1	1	3		6												
A-16	1	1						10			12												
B-2			1	4				104		4	113												
B-3	1	3					1	1	68		76												
B-4	1		2					3	101	1	111												
B-5	1	1	1	1			1	59			66												
B-6									13		13												
B-9		1	1	1	1			1	5		11												
B-10	1		1		2	3	1	4	2	1	19												
B-11	2	1	1	2			1		17		25												
B-12	1	1		4				3	17	1	27												
B-13	1						1	1	30		33												
B-14	1	5 (1)	1		1		2	1	3	32	46(1)												
B-15	2	3		3			3	1	15	2	1	30											
B-16	4		1		2	1		3	1	23	35												
C-2			3				3	24		1		31											
C-3		1							9			10											
C-4	1	1					1	17		1		21											
C-5							2	13		1		16											
C-6		1							7			8											
C-9		1						1	12			14											
C-10			1				3	1	6		1	13											
C-11		2							1		1	4											
C-12	2	1		2			1	1	17			25											
C-13									1	3		4											
C-14	1	3	1				2	1	5			13											
C-15	1		1		1				7			10											
C-16	5	1			2			2	13	1		24											
D-2									2			2											
D-4		1				1(1)		1	19			22(1)											
D-5		1	4		1			2	1	22	2	34											
D-6							1	1	6			8											
D-9			1						5			6											
D-14	2	1				1	2	1		7		14											
E-2			1	3		4				37		46											
E-3	2	1			2	2	1	1	59		1	69											
E-4		1		1(2)	1(1)	1	3	1	11			18(3)											
E-5			(2)	1								1(2)											
E-6		1	1	1	1					1		5											
E-8						1						1											
E-9								3				3											
F-2			1	1		1		6	1			10											
F-3	1	1	4		4	1	2		34	1		48											
F-4				2			1	1	8			10											
F-5	1								24	1		28											
T-1	1	5	6	3	8	1	4	3	4	8	378	1	6	1	429								
T-2	3	10		1		1		3		2	22				42								
T-3	1	1				1				9					12								
T-4	3	1		1			1	2	16						24								
T-5		5						1	2	13					21								
T-6	1	1						4	3	21	1			1	31								
T-7		2	1		1	2		1	14		1		1	23									
T-8		1	2			3	1	3	1	31	1				43								
T-9						1									1								
その他		3				1	8	2	13	15	7	18		1		68							
合計	1	34	61	18	45	34	3	11	46	9	51	61	67	1712	4	4	29	3	2	4	1	1	2201

第2表 北台遺跡出土遺物割合

A												B	C	D	E
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
3	4	5						9							
A 土師質上器	77.78(%)	① 中国褐釉	1.02(%)	⑨ 備前系	0.77(%)										
B 原始・古代の土器	4.36	② 中国青磁	7.42	⑩ 唐 津	2.81										
C 中国産陶磁器	1.91	③ 中国白磁	0.77	⑪ 肥前系磁器	11.76										
D 国産陶磁器	9.86	④ 中国青花	0.51	⑫ 出雲系 意東焼	2.30										
E 不明陶磁器	5.81	⑤ 中国大口	1.02	⑬ 丹波系 產地不明品	13.04										
F 瓦質土器	0.18	⑥ 濑戸美濃	4.60	⑭ 不明磁器	15.60										
G その他	0.10	⑦ 常滑系	11.51	⑮ 不明陶器	17.14										
		⑧ 備前	8.70	⑯ 灰 鉢	1.02										

第3表 北台遺跡出土陶磁器時期別数量

世紀	時代	日本製品					中国製品					中国製品	中国製品	中国製品	中国製品
		13世紀後半	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	明治時代	13世紀後半	14世紀				
13世紀	鎌倉時代	⑦⑦⑦⑦⑦ ⑦⑦⑦⑦								14世紀前後	②②②②②				
14世紀	室町時代	中世	⑮							14世紀代	③				
15世紀	戦国時代	宝町早い頃	⑥⑥⑥							15世紀前後	②②②②②				
16世紀	安土・桃山時代	宝町期	⑩⑩⑩⑩							明代	①①①				
		15世紀	⑧							14~16世紀	②②②②				
		宝町後半(戦国期に近い)	⑧⑧⑧⑧⑧ ⑧⑧⑧⑧							16世紀初頭までのもの	⑤⑤⑤⑤				
										16世紀頃	③				
		16世紀中葉頃	⑥⑥							16世紀後半	④④				
17世紀	江戸時代	17世紀初頃	⑩												
		17世紀代	⑩⑩⑩⑩												
		17~18世紀	⑩⑩⑩												
		17世紀終わり~18世紀	⑩												
18世紀		18世紀後半	①①①①												
		18世紀代	①①①①①①												
		江戸後半	①①①①①①①①①												
19世紀	明治時代	19世紀第2回半期	①②②②②②	江戸の終わり	①①①①①①③①③①③①④④										
		19世紀代	①①①①①①	幕末~明治時代	①①①③①③①③①③①③①③										
		明治頃	③③③③③③	①①①④④④④	①①①④④④④										
		明治以降	①①①③③③③												

○×5破片

○×1破片

○内の番号は第2表下の番号と対応する。

図 版

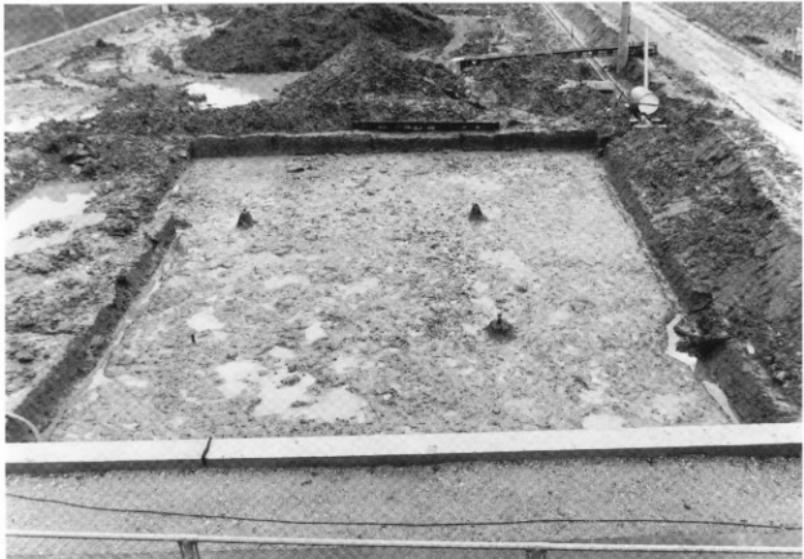


調査地遠景（北東より）

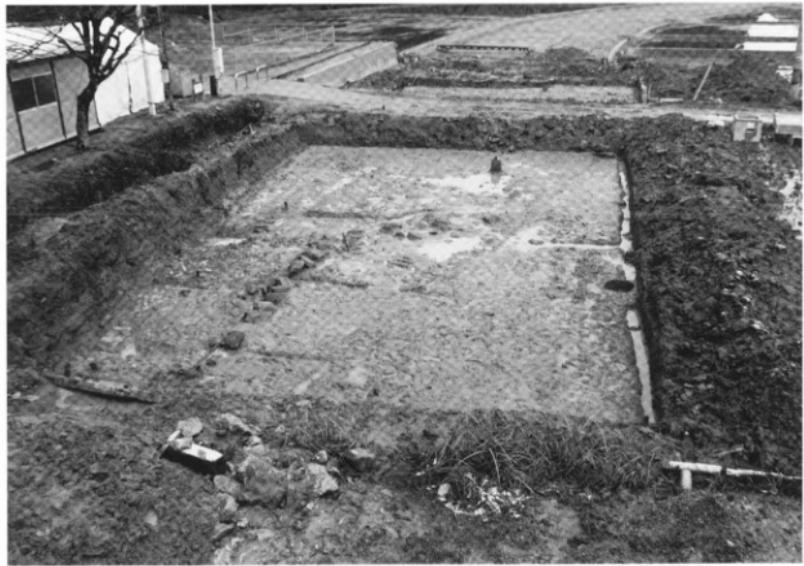


調査前全景（南より）

図版 2



調査区北側全景（西より）



調査区南側全景（南より）



埋 設 桶 (南東より)



柱根検出状況 (西より)

図版 4



柱穴完掘後（西より）



調査区北側作業風景（西より）

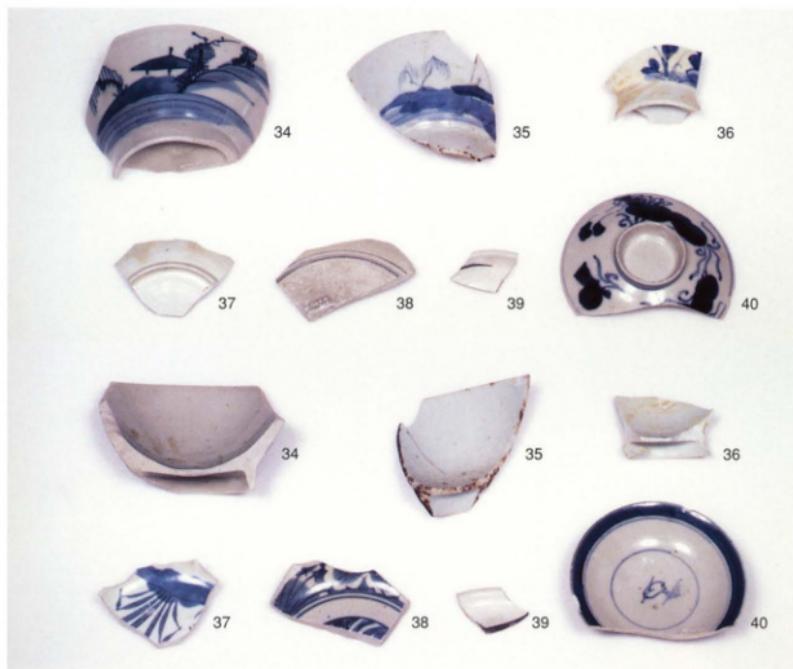
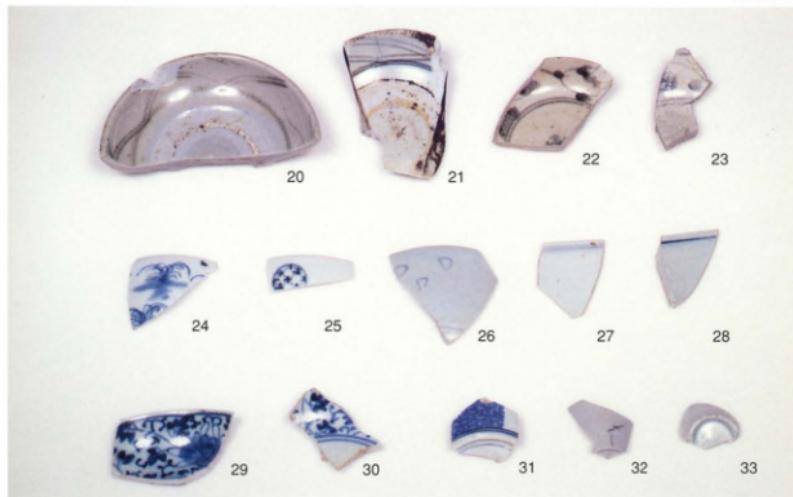
図版 5



原始・古代の土器（番号は実測番号に対応する）



国産陶磁器（番号は実測番号に対応する）

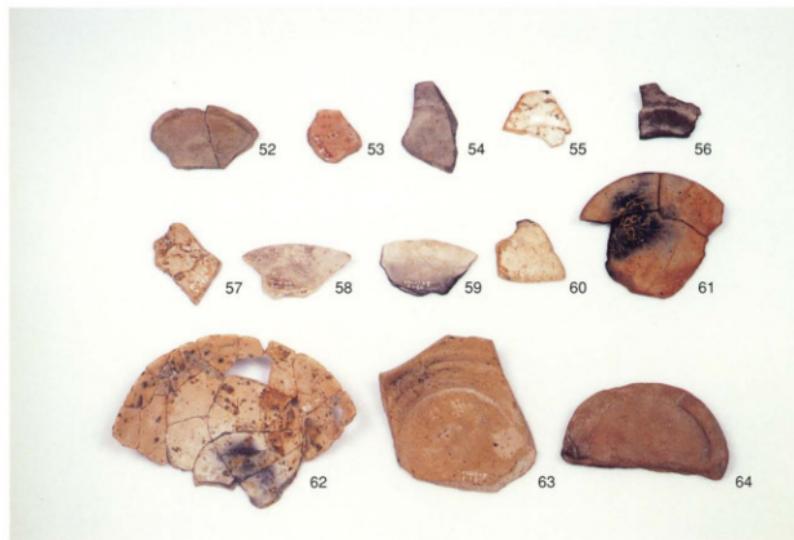


国産陶磁器（番号は実測番号に対応する）

図版 7

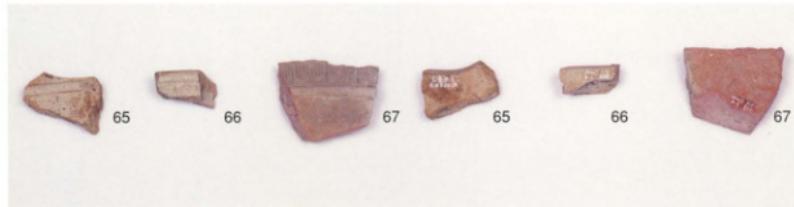


国産陶磁器（番号は実測番号に対応する）

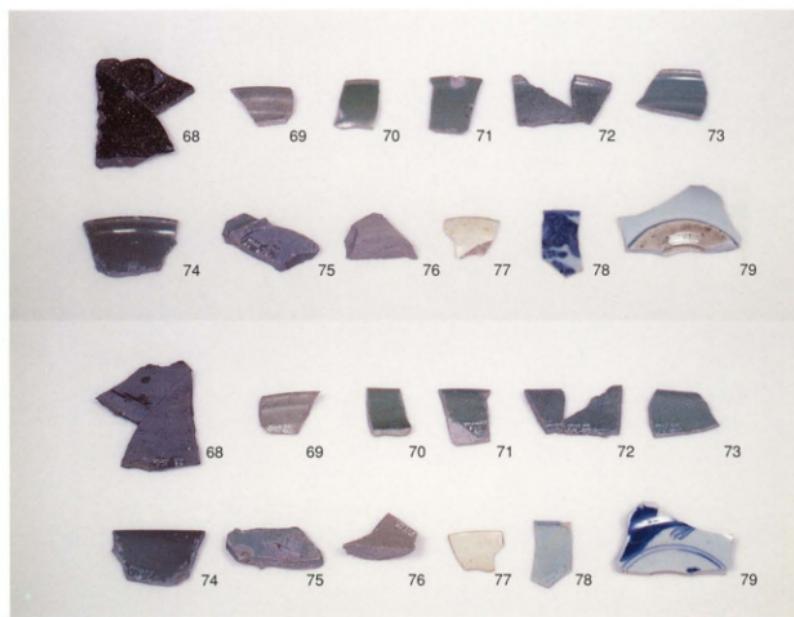


土師質土器（番号は実測番号に対応する）

図版 8



瓦質土器（番号は実測番号に対応する）



中国産陶磁器（番号は実測番号に対応する）



金属製品・漆器（番号は実測番号に対応する）

北台遺跡発掘調査報告書

平成10年(1998年)3月

発行 八雲村教育委員会

島根県八束郡八雲村大字西岩坂316番地

印刷 株式会社 谷口印刷

島根県松江市東長江町902-59